



とみしま・たけお 1931年朝鮮・水原に生まれる。’45年引き揚げ者として福岡県に帰国。’51年早大仏文科に入学。3年のとき“新潮”に発表した『喪家の狗』が同年の芥川賞候補となる。卒業と同時に河出書房に入社。’56年同社より『黒い河』を処女出版。翌年退社。以来作家活動に専念、今日に至る。

新・おさな妻 富島健夫青春文学選集第10巻

初版印刷 昭和46年7月20日
初版発行 昭和46年8月20日

著 者 富島健夫

編 集 株式会社 サン・パブリシティ

東京都千代田区神田神保町1-29 電話(294)2781
郵便番号 101

発行者 陶山 巖

印刷所 大文堂印刷株式会社
錦印刷株式会社

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10 電話 東京(265)代表 6111
振替 東京 15653 番
郵便番号 101

定 価 480円

0393-771010-3041

© 1971 PRINTED IN JAPAN 著者と了解のうえ検印を廃止します

健夫

おさな妻

集英社

目次

好きなひと 5

新・おさな妻 133

あとがき 368

装幀・析折久美子

好きなひと

もうこどもではない

放課後すぐに、宮原淳也は教員室に行った。教員室の電灯は、なぜか教室よりも暗い感じであった。

淳也の担任の浜岡教諭は、ちょうど授業から帰って来たばかりとみえ、立ったまま机の上を整理していた。

「おお、宮原か。どうした？」

長い髪をかき上げて、浜岡教諭は淳也を見た。神経質そうにみけんにしわを寄せるのは、この先生にくせだ。

「先生。お願いがあつてきました」

「うむ？」

淳也は周囲を見廻した。他の先生たちが、机にむかつて腰かけたり立ったりして、声高に談笑している。

「ここではないえません」

「ほう」

「先生はまだ帰られないんですか？」

「いや、もう帰る。きみも駅へ行くんだな？」

「はい。出来たら、歩きながらお話をしたいと思っています」

「よからう。すぐに用意する。校門のところで待っていてくれ」

「はい。すみません。お願いします」

十分後、淳也は浜岡教諭と肩を並べて駅へむかっていた。街灯のともっている道である。前後を、やはり淳也と同じ定時制の男女の生徒が、急ぎ足に歩いている。

「話というのはなんだ？」

「ちょっと言いづらいことです」

「しかし、言うためにぼくとうして歩いているんだらう？」

「はい。そうです」

「じゃ、いえ。ぐずぐずしていると、駅に着いてしまうぞ」

「言います」

淳也はセキをした。あらためてなにかしゃべるとき、人間はその必要もないのにセキをする。

そのことをおかしく思いながら、

「先生、じつはぼく、ある女の子を好きになりました」

「なるほど」

「いや、まだ好きにはなっていないかもしれませんが。好きになりそうになっている段階かもしれません」

「うむ」

「とにかく、交際してみたいんです」

「すればいいじゃないか」

「そう思っています。それで、先生にお願いがあるんです」

「……」

「先生から、その子にぼくを紹介してもらいたいんです」

「なんだ？ 知り合っていないのか？」

「そうです。おそらく、むしろはぼくが存在も知らないでしょう」

「いや、おどろいた話だな」

浜岡教諭は苦笑いしながら、淳也のほうをふり返った。

「生徒から恋の橋渡しを頼まれるとは思わなかったよ。悩みごとの相談はよく受けるけど、こんなのはじめてだ」

「どうもすみません」

淳也はペコリとあたまを下げた。

「まあいい。相手はどんな子だね？ 紹介せよと言うからには、ぼくはその子を知っているはずだが」

「いいえ、先生も知らないはずですよ」

「え？」

「全日制の生徒です」

「うちの？」

「はい」

「じゃ、ぼくは知らん。知らないぼくには紹介しようがないじゃないか」

「いや、直接でなくていいんです。先生も、昼の先生のだれかは知っているでしょう？」

「そりゃ、何人かは知っている」

まず浜岡から、その先生に紹介してもらい、その先生を通じてめざす少女と口をきく。淳也の計画は廻りくどく、そしてあつかましかった。

で、急いでつけ加えた。

「ほんとうは先生、こういうのを破廉恥と言うのでしょう？」

「ま、そんなところだ」

浜岡教諭も、それをみとめた。

「戦前の中学だったら、きみは今頃はここに」

路上を指さした。

「長くのびているところだ」

「ぼくもそう思います」

淳也はあたまをかいて見せた。やはり、きまりはわるいのである。しかし、先生にこういうことを言うのは、当の相手に直接話しかけるよりも勇気を要することであった。

「で、その子は何年でなんという……」

「まだわかりません」

あっさりと、淳也は言った。暗くてわからないけれども、先生はあきれた顔をしたにちがいない。

「朝の電車で、よく見かけるだけです。これからなんとかしてその名を知ろうと思っっているんです。その前に先生がぼくの頼みを聞いてくれるかどうかを知りたかったんです」

「やれやれ」

浜岡はため息をついた。

「ずいぶん先の話だな」

「そうです。でも、先生が承知してくださったら、そう実現性のないことではないと思うんです」

「よからう。しかし、あとでぼくにめいわくがかかるようなことはないだろうね？」

「そんなことはありません。それははっきりと誓えます」

朝のプラットホーム。下りが西がわを発着し、上りが東がわを発着する。当然、客の多くは東がわを向いて電車を待っている。

ある電車が出たあと、ホームに人はまばらになり、しだいにその数がふえ、やがてホームにこぼれるほどになった頃、つぎの上り電車がやって来る。

淳はいつもひとりであった。会社の人もクラスメートもない。

そして、少女もいつもひとりであった。

浜岡教諭に頼んだあくる朝、淳はいつもより早く起きて食事をし、アパートを出た。

プラットホームのなかのひとりとなり、改札口のほうに目をやっていた。

改札口をはいつて来る制服の少女は多い。二人連れもあり、三人連れもある。学校によって制服がちがう。

やがて、淳也が心を惹かれている少女があらわれた。

髪をふたつに分けて編んでいる。それはかなり長い。うりざね顔で、色は白い。目が大きく、鼻はまっすぐに通っている。その稜線は高い。頬のあからみが、その静かな物腰からくるやや暗い感じを消して、健やかな印象をあたえる。中肉中背で、脚の線も太くなく細くない。

彼女はホームに進んで来た。

淳也はホームの端にいる。少女をみつめている。

その前を、まっすぐに通った。淳也のほうを見ようとしてもしない。淳也の視線に気づいているかどうかともわからない。

少女が通ったあとも、淳也は改札口のほうに向けた顔を動かさない。

だれも、淳也のことなどに気をつけていないであらう。けれども、もしだれかが見ていた場合、少女が反対がわに歩いて行ってすぐに顔の向きを変える淳也の気持ちを悟られたらおもしろくない。ひとつのポーズでもあった。

いつもはここまでである。淳也は彼女とべつの車両に乗る。女の子の乗るあとにくっついて乗るなどというまねに、淳也はやましさをおぼえるのだ。それはやくざっぽいまねであって、男児のなすことではない。そんないやしいまねは出来ない。じぶんにそう言いかせていた。

しかし今日、淳也は少女と同じ車両に同じドアから乗った。

降りる客はほとんどいない。開かれたドアにホームの人々は群がり、前のほうからなだれこむ。

淳也の視野のなかで、少女の後ろ姿はもまれた。もまれながら、車内にはいつて行く。淳也ももまれながら乗る。少女が左のほうへ寄せられて行くのを見て、淳也も左がわに行くように心がけた。

車内にはいり、一度消えた少女の姿をふたたび見る。人を二人ばかりへだてた位置に淳也を立たせて、電車は動き出した。

少女はつり皮につかまって、窓の外に顔を向けている。その手は細くしなやかな感じであった。爪はきれいに短くきられている。爪のかたちは細長い。

彼女はいつもこの車両に乗っている。ひょっとしたら、遠くから乗ってくる友だちといっしょになるのではないか。そうであつたら会話を聞くことが出来、その友だちの口から彼女の名が出るかもしれない。

れない。

淳也はそう思ったのだが、そのあてははずれた。車内にはいっても、彼女はやはりひとりであった。

（おれと彼女との間に、じゃま者がいま二人いる。この二人を押しつけて彼女の横に行き）

「失礼ながら、姓名を聞かせて欲しい」

そう言うことは出来ないものか。

それは不可能ではなかった。それぐらいの勇氣はある。

勇氣はあるけれども、あきらかにそれは無法行為であった。いっぺんできらわれてしまふだろう。

やがて電車は、乗った百合が丘駅から三つめの若竹駅に着いた。彼女は出口へ向かう。彼女がこれから行き、五時になると淳也の行く若竹高校は、この駅で降りるのである。

淳也の横を通るとき、

「すみません」

彼女はそう言った。ドアのほうへ行くから道をあけてくれという意味だ。その言葉で淳也は、少女に氣をとられすぎていてその前に立ち足はだかるかっこうになっているじぶんに気づき、あわてて通路をあけた。少女はその間を通り、ホームに降りて行った。ホームはたちまち、若竹高校の男女の生徒でいっぱいになった。少女はそのなかにまぎれ込み、静かに動き出した電車のなかから淳也がさがしたが、見あたらなかった。

淳也はさらに乗ってふたつめの黒山という駅で降りる。少女のいなくなった車内は、急にあじけなくなった。

「すみません」

低く、彼女はそう言った。ややかすれた声であった。淳也がはじめて聞く声である。しかも、まちがいなく淳也にむけて発せられたものだ。

それだけでもひとつの収穫であったと考えるべきだろう。

あくる朝。

今度は淳也は、改札口を出ないで駅の待合室で少女を待った。

駅に着いた人たちは、ためらわずに改札口を通してホームに出て行く。

そのなかにあつて、ぼんやりと立っているのはへんであった。しかし、淳也は強引に立っていた。何人かの女子高校生が通る。

なかには、淳也のほうをちらと見る者もいる。淳也は、帽子はかぶっていないけれども、学生服を着ている。そしてカバンを持っている。

一見しただけでは、定時制の生徒とはわからないにちがいない。

淳也に目をやる少女の目は異性を見る目である。

しかし、淳也はなにも感じない。あの少女以外の何人に誘いの目を向けられても、うれしくはない。わずらわしいだけだ。

やがて、少女は駅の正面をまっすぐにのびている商店街の道を歩いて来た。淳也は大きく息を吸い、気を落ちつかせる。

カバンを持ちなおし、定期券入れを握りしめた。

改札口のほうを向いた。

少女の姿が視野にはいったら、すぐにそのあとについて改札口へ向かうのだ。問をはかった。呼吸をととのえた。

少女の姿が目にはいった。まっすぐに改札口へ進んでいる。

淳也も足を踏み出した。

さいわい、だれにもじやまされずに、淳也は少女のすぐうしろになることが出来た。

少女は改札口を通る。たぶん歩きながらとり出したであろう定期券を、駅員に見せる。

淳也は思いきり首を長くして、その定期券入れを見ようとした。

少女の名を知るためである。

しかし、その目的は達せられなかった。定期券の期日を読んだだけであった。

（やれやれ）

ゆっくりとホームに向かいながら、淳也はじぶんのふがいなさに感心した。少女に心を惹かれるようになってもう何か月にもなるというのに、まだその名すら知っていない。

スピード時代だというのに、なんというのんきなことか。

（これじゃ、いつになったら先生に頼むことが出来るか、わかったものじゃない）

いい方法は思いうかばないのである。やはり直接ぶっつかるとよりほかはないのであろうか。しかし淳也は、遊び好きな少年が使うような手段には頼りたくなかった。少女から誤解されるのがもっともこわい。

その日、駅から学校への道で浜岡教諭といっしょになった。

「どうした？ まだ名まえを知らないのか？」

「はあ。知る手段ありません」

「何年生だね？」

「二年三組です」